

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.24-2 (通巻 69号) 2016.12.6 発行



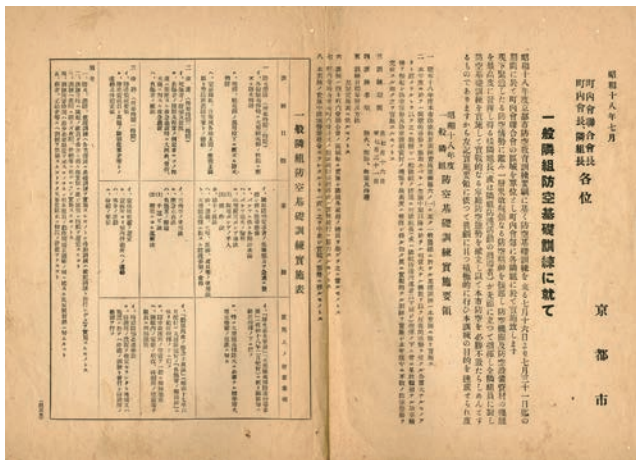
初等科図画1 (墨塗教科書) ※大塚隆コレクション

P.4~5 RENKEI PAX SCHOOL 2016 実施報告に関連記事

Contents

01	スポット ミュージアムの収蔵品 66	一般隣組防空基礎訓練に就て
02	巻頭つれづれ	「寄り添う」ということ
04	平和教育・研究	RENKEI PAX SCHOOL 2016 実施報告 「心の支配」
06		RENKEI PAX SCHOOL 2016 参加記
07	運営委員リレー連載	アルザスの「記憶」とミュージアム
09	おすすめの一冊	『京都ざらい』
10	事業報告	

一般隣組防空基礎訓練に就て



一般隣組防空基礎訓練に就て（1943年7月）26.8cm × 37.8cm

この資料は、1943年7月に京都市が市内の町内連合会長、町内会長、隣組長宛に発行したものです。隣組は、1940年の「内務省訓令第17号」によって成立した制度で、多くの場合近隣の10世帯を1単位として、物品の配給、国債の購入割り当て、金属品の回収、戦時意識の高揚に関する教育を行うなど、「国家による民衆支配の格好の存在」として総力戦体制を維持する役割を果たしていました。この資料も、町内会連合会の区域を単位として各隣組において防空基礎訓練を実施させるために京都市が発行したものです。

1930年代から陸海軍をあげた大規模な防空演習が行われ、工場や住民もこれに協力していました。防空意識の強化も唱えられるようになり、様々な手引書なども発行されました。しかし、1941年に「防空法」が改正されると、それまでは灯火管制や防空訓練への協力義務が中心だったのに対して、改正後は、空襲時の応急防火義務が国民に課せられました。またこの時期、この資料にも「退避訓練」の参照先として挙がっている「時局防空必携」が防空に対する基準書とされ、他の手引書は退けられるようになりました。

この資料で実施を通告している防空基礎訓練は、「昭和十八年度京都市防空教育訓練実施要綱」に基づくもので、空襲を受けた際には消火にあたり、各持ち場を守るための訓練でした。前年の1942年、東京や神戸などの都市に対してアメリカが空襲を行い、80名以上の犠牲が出ていたこともあり、本土への空襲に対する危機感は募っていました。この資料でも「現下緊迫したる防空情勢に鑑み一層果敢強固なる防空精神を振起」することを求めるとともに、「本年度二於テハ間款的奇襲ヲ予期スベキハ勿論・・・相当大ナル機数ヲ以テ反復的空襲ヲ受クル公算大ナルモノアリ」と想定して、「訓練ハ昼間二限ラズ夜間、

仏曉等ニ於テモ実施スル」ものとし、さらに「本訓練ノ実施中防空警報発令セラレテタルトキハ直チニ之ヲ中止シ実戦ノ態勢ニ移ル」と緊迫感を伝えています。

防火消防の訓練では、「各種焼夷弾」に対応した防火消防を行うことになっており、ここに記されているその具体的な業務はバケツや小型腕用ポンプによる送水、砂や濡簾、火叩きによる方法です。こうした消火は町内で起こる小火対策であれば有効ですが、この資料で想定されているような多数機による焼夷弾投下に対しては何の役にも立ちません。

なぜ、隣組の人員に対して京都市は、役に立たない消火方法を命じ、訓練をさせたのか、水島朝穂は、政府が全国の市町村にこうした訓練を命じたのには3つの理由が考えられるとしています。一つ目は、「ムード作り」です。国民に臨戦態勢に付く覚悟を植え付けるためでした。二つ目は備えに目を向けさせることで、日本軍が弱いから空襲を受けると言う意識を回避するためでした。そして三つ目は軍事産業に労働力を留めておくために防空訓練を通じて防空体制を整備させ、隣組同士で相互監視をさせるためでした。

京都市は、神戸市や大阪市のように大規模な空襲を受けることはなく、いわゆる焼け野原となったそれらの地域と比較すると、現在まで多くの建築が残っています。しかし、京都市内にも複数回の爆弾の投下があり、死者もでていました。1945年1月16日の東山区馬町（東山空襲）では、41人、4月16日の右京区太秦の空襲では2人、6月26日の上京区出水（西陣空襲）では、50人の死者が出ました。また、3月19日には右京区春日に、5月11日には上京区京都御所に爆弾が投下されて被害を出していました。

（学芸員 兼清順子）



参考：修道学区馬町附近被爆跡（1945年1月16日）

参考文献
水島朝穂・大前治 2014、『検証防空法 - 空襲下で禁じられた退避』法律文化社。
戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会 2010、『語り継ぐ京都の戦争と平和』つむぎ出版。

巻頭 つれづれ

「寄り添う」ということ

安齋育郎

(立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長)

イノシシの糞の放射能のこと

月一度の福島放射能調査・学習・相談活動の一環として、2016年9月に本宮市と飯舘村の民家を訪れました。

訪れたある飯舘村の農家は、トルコキキョウの生産で農林水産大臣賞を受賞した実績をもっていますが、調査中に畑でイノシシの糞を見つけました。調査チームの車には放射能分析器が搭載されていますので、さっそくイノシシの糞もその場で分析したところ、除染済みの農地には有意の汚染がないのに、糞からはそれなりに高い放射能汚染が検出されました。

私たち「福島プロジェクト・チーム」は、「事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合う」を合言葉に、訪れた場所の状況に見合った実践的な被曝低減方法を提案していますが、イノシシの糞の放射能は改めて「事態を侮らず」という視点の大切さを教えているようでした。しかし、伝え方によっては放射能汚染に対する危機感を過度に刺激し、不安を増長する可能性があります。さて、どう伝えましょうか？



猫も放射線測定器に興味をもっているように見えました。

松の木を移植したい老夫妻

飯舘村の「帰還困難区域」の別のお宅の庭には写真のような立派な松の木があり、長い避難生活による疲労感を滲ませた老夫妻は、相馬の新しい家の庭に移植することを望んでいました。念のために測ってみると、松の木の表面を覆っている古いごわごわした木肌（粗皮）にはかなり高い放射能汚染が残っていました。別にこの松を移植して眺めても被曝が有意に多くなるようなことは考えられないレベルなのですが、さて、どう伝えましょうか？

「過剰反応」をめぐって

本宮市の調査先では、小さなお子さんをもつお母さんが放射能に大きな不安を抱いていました。外出時には子どもにはマスクをさせる、公園での外遊びは控える、地面には座らないようにする、布団は外に干さない、福島や隣県産の食材は買わない、水道水は使わずペットボトルの保存水を購入するなど、事故から5年半経った今でも放射能に対するお母さんの懸念は深刻です。私たちの調査では、周辺の放射線レベルは低く、お母さんの心配は放射線防護の観点からは「過剰反応」と思われましたが、さあ、こういう場合、お母さんにどのように向き合えばいいのでしょうか。「それは過剰反応ですよ。そんな心配は不要です。放射能汚染に対する認識を改めて、生活スタイルを変えるべきです」と「非難・命令調で意見する」のは、おそらく最悪でしょう。私たち「福島プロジェクト」の第一の役割は、被災地での調査に基づいて汚染の実態を科学的に明らかにし、それを被災者の気持ちに寄り添った形でお伝えすることです。そして第二には、「こうすれば被曝をもっと減らして、より安心な生活が出来ますよ」と実践的な改善策を提案することです。その延長線上で、「今の考え方を改めて、こう生きた方がいいのではないですか」と「生き方」の問題にまで踏み込むことには慎重でなければなりません。「価値観の押しつけ」になりかねないからです。では、どうしましょうか？



飯館村の民家の松の木肌にも、汚染が残っていました。移植の希望にどう応えるかが課題です。

「事実を伝える」ということ

イノシシの糞と松の木肌の放射能の問題は、事実をどう伝えるかという問題ですが、私たちは次のように扱うことにしました。

イノシシについては、科学的には未除染の山野の汚染実態を反映する重要な指標ですが、何しろ一頭分のデータでしかありませんし、採取した糞の汚染からイノシシの内部被曝を推定する過程にはいろいろな不確定要因が関わっているので、あまり数値にこだわった説明をしても、それこそ数値に幻惑されて、かえって問題の本質が理解されにくいでしょう。したがって、『調査報告書』には測定結果はきちんと記録しつつも、被曝量の解析過程の詳細に立ち入って数値の意味づけを試みるようなことはやめました。そして、イノシシの糞が私たちに与えた「信号」が、放射線環境の回復はなお道半ばであり、「事態を侮ってはならない」ことを教えていることを再認識し、イノシシの糞については引き続き調査していくことにしました。

松の木については、造園関係者の知識と経験も頂きながら、表面の粗皮を剥がして放射能を除染し、念のために松の葉の放射能もチェックした上で、特段の問題がなければ「帰還困難区域」からの持ち出しについての手続きを進め、松の木の健康上適切な季節を見計らって移植するという提案をすることです。「汚染しています」という事実を伝えるだけでなく、「どうすれば移植可能か」という今後の展望についての具体的な提案つきで、被災者の気持ちに寄り添った説明をすること—これが大切だと思います。

「説明」にとどめ、「説得」は控えるべきか？

本宮市のお母さんは、放射線防護学的に見て「そこまでする必要はありません」と伝えるだけでなく、その延長線上で、「子

の未来のため”と考えると放射線に神経質になっておられるのですが、それが逆に“子の発達を阻害する”ことになる可能性についても考えて欲しい」と付け加えたい気がします。しかし、人の生きざまに踏み込んでモノを言うのは確かに慎重さが求められます。それが「説教」になったら「余計なお世話だ」という反発を招くでしょうし、単純な「説明」に終始するなら無味乾燥で、「何を伝えようとしているのか」と問われかねないでしょう。福島県産は買わないという購買行動について、私は報告書に次のように書きました。

みんながそのような購買行動をとったら福島県や隣県の生産者は成り立たなくなることは事実ですから、私は、懸念すべきレベルの汚染が見られない福島県産や隣県産の食材を、まさに「福島県産や隣県産だという理由で購買対象から排除すること」には合理性がないとは思いますが、最終的にはそれぞれの消費者の自由な選択に委ねられるべき問題でしょう。まあ、焦らずにだんだんお考え頂ければ良いと思います。水道水も、いきなり調理に使う気にはなれなくても、庭への散水や植物への水やり、靴洗いや洗車、洗濯、手洗い、食器洗い、食品の調理やお茶・コーヒー・飲み水など、段階的に解禁の手順を踏めれば好ましいと思います。復興に向けて懸命に努力し、放射能検査にも合格した産物を市場に供給している生産者のご苦勞を知る立場からは、福島県産も含めて、ただ「被災地産だ」というだけの理由で購買対象から排除されないようになることを願っています。

事実を伝えるということ

「客観的な事実を伝える」というのは平和博物館にとっても原則ですが、どの事実を伝え、どの事実を伝えないか、また、伝えるにしてもどのような平和のメッセージをこめて分かりやすく伝えるのかは大事な問題です。これまで何度も書きましたが、ある歴史的事実を「展示するに値する」と考えるかどうかは、館としての歴史観や価値観に関わる問題です。来館者にはいろいろな年齢層、価値観、歴史観の人たちがいますので、事実を通して館としての平和のメッセージを伝えるといっても、そう簡単ではありません。簡単ではありませんが、私たちは近々予定されている国際平和ミュージアムのリニューアルも含めて、過去や現代のさまざまな事実の展示を通して「平和のあるべき未来形」を示唆・提案する効果的な方法を編み出す努力を怠ってはならないと感じています。9月の福島調査は、そんなことも考えさせてくれました。

平和教育・研究

RENKEI PAX SCHOOL 2016 実施報告

「心の支配」

モンテ・カセム

(立命館大学国際平和ミュージアム館長)

企画の背景

近年の世界情勢では、国境なきテロ、排他的思考、差別の進行、真実を求めぬ行動、ヘイトスピーチの増大等が目立つ。社会的規範、個人の生き方の根底にある「価値の高いもの」を失っている危機を感じる。国際的テロの進展では希望を失い暴力の道を選んだ人々がいる一方、裕福な国々からも賛同者が出て、肩を並べて戦っている姿が見える。なぜこうなっているかを探ってみると、考え方を洗脳された彼らの行動が見える。少数数であっても多数の人々を振り回せる状況が日常化している。英国から700~800人の若者がISIS・ISILの武力テロの現場に向かい、戦っていると言われている。だが、英国では、イスラム教の信者200万人以上が平凡な生活を送っている。議会制民主主義のもとで「言論の自由」を保証している英国でさえ、彼らがなぜ沈黙し、我慢してしまうのか、なぜ声の大きいものが真実を問うことなく世界を誘導できるのか、という疑問がある。

近年広まるTwitter等のソーシャルメディアネットワーク手段では、真実を問うことなく民衆の心を動かすことができる力を感じる。米国大統領選挙が終わって間もない頃、Facebook創設者マーク・ザッカーバーグ氏の「SNS情報の信頼性を高める取り組み」が報道されている。立命館大学国際平和ミュージアムの収蔵品や展示会を見てみると、このようなことは戦前の日本にもあったように思う。大正デモクラシーの時代には華々しく受け入れられた西洋文明が、十年後には「贅沢」とされ、避けるべきものになる。この「贅沢を避ける」ことの裏には、国民を戦争に向けるための国家による資金の誘導があるともいえる。「今日」を「過去と未来の交差点」と考えれば、平和的環境が破壊されようとしている「今日」の要因は、「過



平野啓一郎氏の講演



長崎で被爆者の講演を聞く参加者

去」の教訓から分析できるともいえる。このような分析力を向上させ、その成果を教育、研究、展示活動を通じて社会に広めることを念頭に置き、今回、イギリスのリバプール大学(University of Liverpool)と共同で日英12大学の共同体「RENKEI」※1による大学院生向け短期集中型スクーリング・プログラムを企画・実施したところである。

プログラムの内容

「心の支配」(英語では「Enslaving the Mind」)をテーマに、9月14日から23日まで10日間に渡って実施した本プログラムに、15か国から22人の大学院生が参加した。英国から2大学、リバプール大学とニューキャッスル大学(Newcastle University)、日本側から4大学(立命館大学、立命館アジア太平洋大学、京都大学、名古屋大学)の院生が参加し、立命館大学、リバプール大学、九州大学、長崎大学および長崎市から指導教員と講演者の派遣があった。指導プログラムを通じて刺激を受けた参加者は4つのグループに分かれ、それぞれ創造性豊かにその後の作業に取り組んだ。各グループは、それぞれのテーマについて検証し、それをナラティブ(語り)に展開した上で展示と体験学習ゲームの創作に努めた。

指導プログラムの内容は豊富だった。長崎の被爆者、研究者、長崎市長等と会い、原爆の歴史から今日の核廃絶運動を取り巻く環境を考えたり、平野啓一郎氏(芥川賞作家)が講演で「個人のアイデンティティの単一化を進める社会政治環境」に疑問を投げかけたり、ラジャ・シェハデ氏(Raja Shehadeh、人権弁護士作家)が第二次世界大戦の悲惨な歴史から誕生したイスラエルにおける「アイデンティティの確立とパレスチナ人との共存関連の矛盾」を問いかけたりと、刺激の多いスクーリング・プログラムを経て、参加者たちは成果物の作成に取り組んだ。

編成された4つのチームの受講生たちは、立命館国際平和ミュージアムの収蔵品の中から各グループが一つを選び、それ

※1 RENKEI (Japan-UK Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives)

人材育成・社会貢献を目的に日英大学間の連携を基盤にした、高等教育機関と産業界の連携強化を目指すパートナーシップ・スキーム。ブリティッシュ・カウンシル(英国文化振興会)が事務局を務める。



ラジャ・シェハデ氏の講演

を中核に置いて「心の支配」を表すストーリーを作成し、成果物として「平和を表す展示品」と「体験学習ができるアナログ・ゲーム」を創作するように努めた。その結果、「恐怖」（ガスマスク）、「原爆」（広島で被爆した生徒の弁当箱）、「検閲」（墨塗教科書）^{※2}をテーマにした完成度の高い創作品ができた。今回のプログラムは学際的分離融合型PBL（project-based learning、プロジェクト・ベースト・ラーニング）を通じて、専門性を超えて横断的に活用できる学びの場として、また、表現力やスキル向上の場として貢献したと言える。「RENKEI」の院生向けスクーリング・プログラムとして今回実施したPAX SCHOOLは、こうした点で評価できると考える。

成果の意義

作成された展示品は、立命館国際平和ミュージアムが開設以来努めてきた「記憶の継承」を表現したと言え、体験学習型ゲームでは開設20周年の2012年以降にミュージアムが力を入れてきた「平和構築のための行動」を具体化する手段だと感じた。

参加した院生のアンケート調査結果（表1参照）に見るように、プログラムに関する満足度は高く、「今後国際学会等で発表したい」、「プログラムの成果をもっと発展させたい」などの

※2 初等科図画1（墨塗教科書）

表紙の写真はRENKEIプログラムの中の展示・ゲーム創作で用いられたものです。国語や社会の教科書が墨で塗られたものはよく見られますが、図画の教科書もその対象となり、戦闘機が墨で塗りつぶされています。教科書は1942年の発行ですが、所有者はお下りの教科書を引き続き使用していました。

感想が出されており、平和のメッセージを広めることにつながると思われる。立命館のミュージアムをPBLの学習現場として活用し、大学院の短期留学生を受け入れる学際的なプログラムを展開する可能性も考えられる。今回、総合先端学術研究科、国際関係研究科、映像学部、ゲーム研究センターおよび政策科学部がこのプログラムに教員と院生を派遣した。また、立命館大学と立命館アジア太平洋大学の学術交流関係の強化も図られた。実施の事務体制も、日常の垣根を越え、学術情報部（国際平和ミュージアム）と総合企画部（国際連携課）の協力の下で取り組まれ、学術効果が高まったと言える。



院生たちのプレゼンテーション

来年（2017年）、本プログラムは英国のリバプールを舞台に、同様の実施体制で「心の開放」（英語では、“Emancipating the Mind”）をテーマに行われる予定である。リバプール大学とリバプール市内の国際奴隷博物館（International Slavery Museum）の共同で実施する企画が上がっている。この二年間に渡る取り組みによって、立命館大学とリバプール大学の教育・研究交流が一層深まり、立命館大学国際平和ミュージアムと国際奴隷博物館の間に新しい関係が生まれることによって、日英学術協力に貢献することも期待される。本プログラムの実施により、立命館大学国際平和ミュージアムの第3ステージ・プランの中心課題である「平和研究の高度化およびミュージアム展示のリニューアル」に役立つヒントが得られたと言える。学園の「平和と民主主義」という教学理念に鑑み、このプロジェクトを発展させるためにも、立命館大学および立命館アジア太平洋大学が来年度院生と教員を英国に短期派遣するよう期待する。

	Strongly Agree	Agree	Neither Agree nor Disagree	Disagree	Strongly Disagree
This workshop met my expectations	7	6	2	2	0
Overall, this was a high quality workshop	7	8	1	1	0
I have acquired new knowledge and/or skills from taking part in this workshop	10	7	0	0	0
I am motivated to apply what I have learnt to my own studies	9	6	2	0	0
I am motivated to share my learning and knowledge with others in my community	10	6	1	0	0
I have developed new networks/contacts	9	7	1	0	0

表1

RENKEI PAX SCHOOL 2016 参加記

シン・ジュヒョン（立命館大学大学院 先端総合学術研究科）



1. RENKEI PAX SCHOOL の場

2016年9月14日から23日まで立命館大学がホスト校となり『RENKEI PAX SCHOOL 2016』が「Enslaving the Mind」というテーマで開催されました。平和を話し合うために様々なバックグラウンドを持つ日本とイギリスの学生たちが京都に集まり、筆者は新しい仲間たちと会うことに多少緊張しながら参加しました。

日本やイギリスだけではなくマレーシア、香港、ベトナム、ブラジルなど韓国人留学生である筆者も含めて実に多国籍の学生たちが参加していたため、国際的な雰囲気を感じました。このような環境のなか、被爆、平和、戦争などテーマにつながる多様な議論が繰り広げられた「場」であったと思います。

非常に興味深かった山根和代先生の平和教育、平和博物館についてのイントロダクションに始まり、昔から大ファンであった小説家平野啓一郎氏と Raja Shehadeh 先生によるスペシャル講演などが行われ、14日から23日まで充実したプログラムでした。立命館大学国際平和ミュージアムを観覧する時間もあり、平和のための博物館の役割、またはその実践的な努力について学ぶ機会になりました。

2. 平和を探す旅

太平洋戦争のときに原爆の被害を受けた長崎での旅は、非常に感動的な記憶と思い出の時間を与えてくれました。

筆者をはじめ多くの参加者たちにとって初めての長崎訪問でした。戦争や原爆の陰を感じさせないほど美しく、イキイキとした町でした。綺麗な教会が多く横浜とはまた違う港町である長崎の博物館に行く途中にあった平和公園には、平和祈念像や原爆被害者のためにあちこちに置かれたミネラルウォーターを目にし、とても心に残りました。「長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）」での鈴木達治郎センター長と朝長万左男先生の講義とともに田上長崎市長のご講演からは、原爆や戦争がいかに多くの人々の全てを奪うのかを改めて感じることができました。原爆被害者の方の語りは本当に感動的で心から深い痛みを感じました。淡々と悲しく辛い経験を語る姿に尊敬の念

を覚えました。その勇気に裏付けられた説得力と気迫を感じるものでした。参加者の積極的な質疑応答も深く印象に残っています。

3. 平和を考える、そして作る

グループディスカッションでは4つのグループに分かれ、5つのテーマから決めたテーマとそれに関連するトピックについて議論する時間をもちました。その後、ゲームを作る時間では先生方のアドバイスを受けながらみんなで協力できました。グループのメンバーからもいろいろな新しい意見が提案され、参加者全員が素晴らしい展示とゲームを完成させることができました。たとえ私たちのグループが賞を受けることはできなくても一緒に作ったということが誇りになりました。今後の平和にとって何を考えるべきかについて実際に平和に関連する展示とゲームを作ることが貴重な経験になりました。

4. RENKEI PAX SCHOOL 新たな平和の始まり

RENKEI PAX SCHOOL 2016には小さな考えの対立や葛藤もありましたがそれぞれ違った方法でお互いを理解し、真の平和とは何か、平和とはどのようなものかについて考える意義深い時間を作ることができました。

実は、最初は自分たちの力で完成できるのかに疑問を持っていました。参加者には国や文化、歴史や現在の状況などバックグラウンドの違いがあることから、平和の定義や平和へのアプローチが異なり、些細な意見の不一致もありました。しかし、我々が一緒に協力しあい、積極的に理解しようとした時間や自分たちの平和について一生懸命熱く語りあった時間から、新しい未来への平和をいうキーワードを発信できると感じました。今回参加できる機会をいただいたことに心から感謝しています。最後に、国際平和ミュージアムのカセム館長のお話を引用するならば「離れていてもみんなが繋がっている」ように今夏のPAX SCHOOLの参加者たちから平和が世界へ広がっていくことを信じます。

アルザスの「記憶」と ミュージアム

中本真生子

(立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
/ 国際関係学部准教授)

フランスとドイツの国境の町、ストラスブールの共和国広場には、一体のピエタ像が設置されています。母マリアが息子イエスを抱く通常のピエタ像とは異なり、この「嘆きの母」の膝には、二人の息子が抱かれています。この息子たちは「ドイツ兵として戦死した息子」と「フランス兵として戦死した息子」を現しています。私が研究対象としているのはこの、ドイツとアルザスの間を揺れ動いたアルザス地方の歴史・文化（の変容）についてです。

神聖ローマ帝国からフランスへ

アルザス地方は現在はフランスに属しますが、かつてはドイツ語圏の「神聖ローマ帝国」に属していました。フランス領になったのは17世紀半ば、三十年戦争の結果です。このことからわかるように、アルザスの住民の言語は、はるか昔からドイツ語系のアルザス語であり、この状況はフランス領になってからも変わりませんでした。しかし1789年に勃発したフランス革命以降、心理的に大きな変化が起こります。「自由・平等・友愛」を掲げたフランス革命、それに続くナポレオンによるヨーロッパ征服戦争を通して、アルザスの人々に「フランスへの帰属意識」が生まれたのです。近代国民国家の成立とともに、アルザスの人々はドイツ語系の言語を話しつつ「フランス人」という意識を、徐々に持つようになっていきました。

普仏戦争とアルザス

このような状況が一変したのが1870年に起きた普仏戦争です。フランスは敗北し、アルザスおよび北部ロレーヌ地方はドイツに割譲されることになりました。この割譲に対して、アルザスの人々は激しく抗議しました。ドイツは、「アルザスの住民はドイツ語を話すドイツ人であり、我々は彼らを取り戻したのだ」と主張しましたが、アルザスの多くは自身をフランス人と意識していたのです。しかし、結果的には大部分の人々はアルザスに留まり「ドイツ人」となりました。心情的には複雑であったにせよ、日常語、書き言葉はドイツ語だったことから、



母子像

日々の生活自体に大きな変化はなかったとも言えます。フランスへの復帰を目指す運動や、ドイツでの兵役を逃れるための亡命は続きましたが、1890年代あたりからは「ドイツ国内での自治権獲得」運動が盛んになっていきました。

第一次世界大戦とアルザス

こうして40年が過ぎた後、1914年に第一次世界大戦が勃発します。アルザスの若者はドイツ軍へと徴兵され、その一方フランスは「アルザスを取り戻す」というスローガンを掲げました。今度の勝者はフランスでした。1918年、アルザスは再びフランス領となります。

公用語はフランス語と定められ、アルザスの小学校ではドイツ語が禁止されました。社会制度や経済、教育、そして徴兵に関わる転換は、普仏戦争後にドイツとなった時と同様だったと言えますが、それに加え「言語」の変更を要求されたことにアルザスは大きな不満を抱きます。「ドイツ語を守る」「アルザスの独自性を守る」「ドイツ時代に保証されていた自治権を取り戻す」、そして少数派ではあったものの「ドイツへの復帰」を求める運動も展開され、その一部はやがてナチス・ドイツと繋がっていきました。

第二次世界大戦とアルザス

そして1939年、第二次世界大戦勃発。国境から40キロメートル以内に居住する約60万人が、フランス南西部へ強制的に疎開させられ、若者はフランス軍へと徴兵されました。しかし1940年6月、フランスはドイツに降伏し、アルザスはドイツに併合されます。住民は「ドイツ人」としてナチス・ドイツの支配下に組み込まれ、1942年からアルザスの若者はドイツ軍に召集されます。大戦勃発時にフランス兵として戦場に立った若者が、今度はドイツ兵として戦場に送られたのです。徴兵を拒否する者は、本人のみならず親族も収容所に送られました。そのため「心ならずも」召集された若者は10万人を数え、大半が東部戦線に送られました。彼らは戦後も「ドイツ兵」とし

てソ連の捕虜収容所での強制労働に就かされ、多くが命を落としました。

戦後アルザスと「沈黙」

戦後、フランスに復帰したアルザスは、ある種の虚脱状態に陥りました。短期間とはいえナチス・ドイツの一員となったこと、フランスから「見捨てられた」という思い、強制召集とはいえナチス・ドイツの兵士として戦場に赴いたこと、そして「レジスタンス神話」という第二次世界大戦期のフランスの記憶からの疎外。さらに「オラドゥール事件」（リムーザン地方の村民642名がナチスの武装親衛隊に虐殺された事件）に関与したとして、1953年に元強制召集兵が逮捕され有罪判決を受けたこと（ボルドー裁判）は、「裏切者」と見なされている、という感覚をアルザスに与えました。戦間期に盛んであった地域主義、自主主義は影を潜め、アルザス語も、それがナチス・ドイツへの併合を招いたという意識から、若い世代に伝えられなくなり、若者の言語はフランス語になっていきました。そしてその後の数十年間、アルザスは、第二次世界大戦については「沈黙」し続けました。

その状況に変化が起きたのは1980年代半ばです。当事者たちの高齢化と共に「沈黙」は徐々に破られ始め、1990年代に入ると強制召集兵に関する証言や研究、ソ連の捕虜収容所で亡くなったアルザス人の調査が始まりました。この時期はまた、アルザス語話者が減少し、さらにEUの発足に伴ってドイツへ働きに行く者や、アルザスに居を構えるドイツ人が増加した時期でもあります。人口が流動化し、地域のまとまりが希薄化する中で、第二次世界大戦の記憶の掘り起こし、研究が活発化しました。そして、その集大成として誕生したのが、2005年に開館した「アルザス・モーゼル記念館」です。ここまで述べてきたような複雑な歴史、記憶を抱える「国境の地」に建設されたミュージアムは、何を、どのように展示しているのでしょうか。

アルザス・モーゼル記念館

記念館が建設されたシルメックは、第二次世界大戦中にナチス・ドイツの治安収容所があった「記憶の場」です。展示内容は17世紀半ばから20世紀半ばまでの、仏独の間で揺れ動いたアルザスの「苦難の歴史」を辿るものですが、展示の大半を占めているのは第二次世界大戦期です。展示内容を簡単に辿ってみましょう。第一の部屋には、ドイツ語、フランス語、アルザス語の三言語での吹きが満ちる中、1648年から1939年までのアルザスの歴史が簡潔にまとめられています。次の部屋から第二次世界大戦が始まり、強制疎開させられた人々を乗せた汽

車、ナチスによる併合と「ゲルマン化」（三色旗から鉤十字へ、道路標識がフランス語からドイツ語へ、そして朗々と響くヒトラーの演説）、強制召集兵が手続きをした部屋、抵抗者が送られた収容所、そして戦場と化したアルザスの光景へと続きます。そこを過ぎると、強制召集兵やソ連の捕虜収容所に関する資料などが展示され、突き当りには裁判所の円柱二本が地下深くへと伸び、その底ではボルドー裁判の映像が流れています。最後の小部屋には、独仏和解とヨーロッパ統合（ドイツの若者とフランスの若者がストラスブルグで出会い、手を取り合うという映像）が示されています。

アルザスは「犠牲者」か？

この展示内容からは、「仏独間の争いの犠牲となってきたアルザス」の姿を提示し、対独協力という「汚名」を晴らそうという意図を読み取ることができます。アルザス出身の歴史研究者J-L. ヴォノーは、この記念館建設に向けて「今こそアルザスの疑念を晴らす時である」と述べています。その一方、「犠牲者」としてのアルザスを全面に出したこの展示内容に対して、アルザスは一枚岩の「犠牲者」だったわけではない、対独協力者もいたし、数は少ないもののドイツ軍への志願兵もいた、密告者もいたし、ドイツからの「帰還者」たち（1918年にアルザスを追放された者、ドイツ国籍を選んでアルザスを去った者）もいた、さらには戦後、「対独協力者」を密告し粛清した事実もある、アルザスの現在の問題と向き合うためには、このような一枚岩ではない「記憶」がむしろ重要であり、単なる「犠牲者」ととどまってはならない、という声も聞かれます。また、現在のアルザスに見られる政治的傾向（極右政党である国民戦線への支持率の高さ）と「犠牲者としての記憶」がどのように関係しているのかという考察は、たしかに必要なと思われる。

普遍的メッセージ

ただそれと同時に、この記念館を建設する意義について、ナショナリズムの対立、民族紛争、戦争、難民、そしてナチズムといった20世紀ヨーロッパの苦難の象徴という一種の普遍性が意識されていたことも、最後に付け加えておきたいと思います。この記念館が、ひいてはアルザスが体現する「本人の意思を無視して国籍が変更されること」、「家族、親族、隣人が別の国家／民族に別れて敵となること」の苦しみを繰り返してはならないというメッセージ、そして最後の「仏独融和」を現す展示室に込められた未来への希望についても、私たちはしっかりと受け止めなければならないでしょう。

『京都ざらい』

井上章一著

朝日新聞出版

2015年



本書は本ミュージアムが立地する京都に固有の住民気質について読み解いた書籍であり、ベストセラーとしてすでに著名な本である。小職のように北関東から出てきた人間にとっては、考えさせられる内容も含まれており、生来の京都人ではない方々も読者にはおられるだろうから、賛否両論の激しく分かれる本書ではあるがあえてここに紹介させていただこうと思った次第である。

著者である井上章一氏は、建築から人文科学の道へ転身されて近年は風俗史研究にも取り組まれている。ご自身は幼少の頃から嵯峨の子として育ったが、同じ京都市内でありながら町中のいわゆる洛中と呼ばれるエリアに対しては、一種の負い目と反感をもって向き合ってきたことが独白されている。洛中に住む京都人にとっては、嵯峨は言うに及ばず西陣ですら京都ではないのだそう。山科に至っては若い人の中にも嫁に行くことをためらうような時代があったとのこと。えええ、そうなんですか？地方から出てきて現在市内に住んでいる私にとっては、嵯峨は自然と寺院などが共存する美しい場所であり、西陣も天明の大火をくぐり抜けた古い町並みが残る場所である。むしろ洛中と呼ばれるエリアの方が大火によってこれまで何度も焼けてしまっているのではないかと単純に考えてしまう。確かに表面的・物理的に見ればそうかもしれない。しかし問題は物質的な古さではなく、場所に対する精神的な帰属意識であり、洛中というエリア意識を共有できるかがカギなのだろう。

「洛中棲息者以外は京都人ではない」という本書で紹介される言葉以外にも、しばしば採りあげられるものに「少なくとも三代にわたり住み続けないと京都人としては認められない」と言うフレーズがある。この「三代」にはどんな理由があるのだろうか、そう思い立って自分なりにあれこれ考えてみた。

今から三代さかのぼれば概ね100~150年ほど前ということになる。その時代の市街地の範囲を確認しようと思うと、明治期の陸軍測量になる地図が最も古い正確な地図として参考になる。これをみると当時から市街地として家屋が密集していたエリアは、北は下鴨神社のある辺りから南は京都駅周辺まで、東

は鴨川のやや東側の範囲を起点に西は二条城辺りから西陣までというサイズであり、今とは比較にならないほどコンパクトな市街地だったようである。さらに遡って秀吉時代の御土居に囲まれていたとされる範囲とこの明治期の市街地を比べてみても、若干東へ移動している部分もあるが面積そのものはさほど大きくは変わっていない。このエリアは今も洛中と呼ばれる範囲と概ね重なるものと思われる。

ここから判ることは、京都の市街地部分は少なくとも安土桃山時代以降から明治時代に至るまでの長きにわたって特定のコンパクトな範囲に限定されており、現在のように京都盆地一杯に市街地が拡大したのは、せいぜい明治期より以降のこの一世紀ほどの出来事である、という事実である。

なるほど今から「三代以上昔からすんでいる」ことを「京都人」の条件にするということは即ち、まだ京都の市街地がおおよそ御土居の内側の範囲にしか存在しなかった時代から、その市街地で暮らしていたことが条件となる。結局のところ当時から市街地居住者以外は「京都人」には該当しないことになり、京都人と認められるためには明治以降に拡大する前からの「歴史ある市街地エリア」の出身者でなければならないという、井上氏の論を地理的に支持する結果となってしまった。

洛中、おそるべし。

本書の中で洛外として採りあげられている地域は今でこそ市街地として発展しているが、かつては長い期間にわたって郊外だった場所ということになり、その考え方が未だに特定エリアへの帰属意識の根底に横たわっているのであろう。

そう考えると、これから三代を経た将来でも「京都人」の生息範囲が拡大するとは考えにくい。なぜなら、あらたな帰属意識の形成にはあらたな外部対象エリアの設定が不可欠であり、もともと限られた平地しかない京都盆地では市街地が既に限界まで拡大しているために、「さらに拡大を果たした後に、『昔は田舎だった』と新参の市街地を外部位化する」ことが物理的に不可能となるからだ。「三代住んでいないと京都人ではない」という考え方と、「三代住んだら京都人として認められるか」は、本質的に別の問題のようだ。

万一、将来に現在の洛中エリアが荒廃し、逆に洛外エリアがあらたな都心に成り代わるような事態となり、さらにそれが三代以上にわたり維持されるような時代が来れば、内と外との差別意識もどうにか上手く中和されて、平和が訪れるのかもしれないが。

大窪健之

(立命館大学国際平和ミュージアム運営委員 / 理工学部教授)

第101回

「遺品の語る沖縄戦—遺骨収容家・国吉勇」

会期：2016年6月4日（土）～6月26日（日）

主催：国吉勇応援会

共催：灘校生徒会有志 / 立命館大学国際平和ミュージアム

本展では、約60年にわたり沖縄戦犠牲者の遺骨や遺品の収容を行ってきた国吉勇氏の活動と灘校生徒会有志による「灘校生徒会 沖縄戦企画」の成果を紹介しました。

沖縄県真和志村（現那覇市）生まれの国吉氏は幼いころに沖縄戦を経験し、母、祖母、兄弟らを戦時中に亡くしました。戦後、小学生時代にはガマを遊び場に、沖縄戦犠牲者の遺骨をたびたび見ていたといいます。これらの経験がきっかけとなり、高校卒業後、遺骨収容活動を始めることとなります。

国吉氏は年月の経過とともに土へ還ってしまう遺骨や遺品を収容することで、戦没者の思いを伝えたいとボランティア活動を続けていましたが、2016年3月、体力の限界などを理由に遺骨収容活動を引退しました。

展示では、国吉氏が収容した遺品約30点と沖縄国際平和研究所提供の写真に加え、灘校生徒会有志が沖縄戦経験者にヒアリングした内容を紹介しました。

国吉氏の活動に感銘を受け、沖縄戦の実態を伝えようと1年間にわたり企画に取り組んだ灘校生徒会有志の思いを表した展示となりました。



第102回

「ポストカード・インパクト」

会期：2016年7月12日（火）～8月26日（金）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

日本の郵便制度は1871（明治4）年に始まり、その2年後には官製葉書が発行されました。1900（明治33）年に私製葉書の使用が認められると、写真・印刷といった複製技術の発展とともに爆発的な絵葉書ブームが起きました。

当時の絵葉書は、制作側が発信した特定のイメージを購入者が受け取るだけでなく、購入者がそこに個人的なメッセージを載せて拡散することができる、新しい視覚メディアでした。

展示では、ミュージアムが収蔵する約9,000点の中から、観光地の風景や名所の案内、博覧会やイベントの記念、災害の速報、植民地や占領地イメージ構築、戦時のプロパガンダなど多様なスタイルの絵葉書を紹介し、その歴史を概観しました。

なお、本展は2016年度博物館実習の実習生7名が設営および絵葉書の複製作成を担当しました。



第103回

ミュージアム・この1てん
「あたらしい憲法のはなし」

会期：2016年9月13日（火）～10月2日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

日本国憲法が1946（昭和21）年11月3日に公布されてから、70年を迎えました。本展は、1947年8月に新制中学1年生の社会科の教科書として発行された『あたらしい憲法のはなし』の翻刻版を展示し、改めて憲法を考えるきっかけとなることを願い開催しました。

本書の発行は、日本の民主化と非武装化を円滑に進めることを狙う連合国軍総司令部民間情報教育局からの要請によるものでした。当時、他の教科書では墨塗り教科書や上級生のおさがりなどを使用する中、『あたらしい憲法のはなし』は生徒全員に新品が配られたといいます。その後、国際情勢が転換した1950年に副読本へ格下げ、1952年には教科書から取り下げられました。

憲法前文にうたわれる「民主主義」、「国際平和主義」、「主権在民主義」の重要性を平易な言葉で伝える本書は、敗戦後、戦前とは異なる道を模索し続ける国家や個人のあり方を示し、当時の人々に鮮烈な印象を与えました。そして、繰り返し復刻され、今もなお様々な場面で引用されています。



世界報道写真展 2016

—WORLD PRESS PHOTO 16—

京都会場（立命館大学衣笠キャンパス）

会 期：2016年6月3日（金）～6月25日（土）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホール

参観者：4,223名

滋賀会場（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）

会 期：2016年6月27日（月）～7月8日（金）

会 場：エポック立命 21 エポックホール

参観者：852名

大分会場（立命館アジア太平洋大学）

会 期：2016年7月11日（月）～7月24日（日）

会 場：A棟コンベンションホール

参観者：2,342名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、
世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会、全日本写真連盟、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS 京都、滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会、NHK 大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社



京都会場の様子

本展はオランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界規模の写真展で、今年で59回目を迎えました。本学では1995年から開催しています。今年は京都会場である当ミュージアムから開幕し、その後日本全国を巡回しました。会場には「世界報道写真コンテスト」の入賞作品150点が、「スポーツニュース」「スポーツ」など8部門のテーマごとに展示されました。今年の大賞作品は、セルビアとハンガリーの国境を越えようとするシリア難民の男性と子どもを撮影したウォーレン・リチャードソン氏（オーストラリア）の写真で、国境の有刺鉄線付きフェンスができあがる前にハンガリー側へ渡ろうとする難民の緊迫した様子を伝えました。

例年と異なり6月の開催となりましたが、期間中、京都・滋賀会場ともに多くの方にご来場いただき、大きな反響がありました。来館者には一枚一枚に向き合うことで、世界でいま何が起きているのかを受け止め、「平和」について考えていただく機会となりました。

来館者 アンケートより

思っていたよりもずっとすばらしく、ひきこまれるものばかりでした。印象的な写真の前では何分間もたちどまってしまいました。色々なことを考え、イメージしました。泣きそうになる作品もありました。でも考えるよりも、こういうのを「感じる」だとか「心にぐっとくる」というのだらうと思いました。そういう感覚が得られたことも含め今日はとても良い経験になりました。来て良かったです。（10代 高校生 京都府内）

中東地域での写真、難民の写真がとても増えたと思う。大人、子どもにかかわらず、写っているほとんどの人の目の色が消え、悲しみに暮れている様子に心が痛んだ。破壊された町の写真を見ると、同じ地球とは思えない。そしてそこにいる人々を見ても、平等に扱われるはずの人間であるのに、自分との境遇の違いに衝撃を受けた。（20代 学生 京都市内）

写真でないと伝わらない真実、事実の重みが伝わってきます。ぜひ、今後ともフォトジャーナリズムの展示を続けてください。（50代 教育関係者 大津市内）

何度かご案内をいただき、今回初めて来館することができました。今日、世界各地で起きている様々なできごとを写しとった写真を見て、新聞・TVなどの報道で知っている情報とは別格の印象・感動を覚えた。動く映像とともに、静止画像であるスチール写真の威力に改めて心を動かされた。貴重な機会を与えていただいたことに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。（70代以上 京都府）

公開記念講演会

「戦争の記憶の継承と写真の役割」

日 時：2016年6月10日（金）16：30～18：30

場 所：国際平和ミュージアム2階会議室

講 師：エリック・ソームルズ博士

参加者：100名

“How to Convey War Memory to Future Generations: Roles of Photographs”/
Dr. Erik Somers (the NIOD, Netherlands Institute for War, Holocaust and
Genocide Studies, Researcher/ Program Manager)

オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所より歴史研究者のエリック・ソームルズ博士を迎え、公開記念講演会を開催しました。第二次世界大戦の歴史や記憶に関する著書があるソームルズ博士は、戦争の記憶の継承に博物館がどのように貢献できるか、また写真の役割の重要性に焦点をあてて講演しました。

この数十年で戦争博物館・記念館の数は世界的に増加し、特にオランダにおいて顕著であることをデータとともに示し、そうした人々の関心の高まりについては、特に来訪者数の多い館を具体例に「その場所を訪れることで過去を知りたい、ひいては過去の意味を知りたいという要望が高まっている」と分析しました。しかし過去との時間的な距離はますます広がっているとして、今後の博物館の役割は普遍的なものを提供することが



より重要になるとともに、新しい展示方法の検討が必要であることを強調しました。また、戦争に関する記憶の文化について触れ、個人的・社会的・文化的・政治的記憶の4つに分類される記憶の文化は相互に影響し合い、展示を通して博物館がそれらをどのように提供しうるのか、これまでに関わった多くの博物館の展示や企画を例に挙げて論じました。さらに博物館における戦争やホロコーストの展示表現の変化について言及し、過去への洞察を導く写真の力と、そうした写真がどのように活用されているかを豊富な事例で紹介するとともに、戦争体験者が亡くなる中で、過去の視覚化を可能にする写真の役割とその重要性を語りました。満席となった会場には市民や学生、教職員が熱心に講演に聞き入り、最後の質疑応答まで活発な議論が交わされました。

トークイベント

「フォトジャーナリズムは時代にどう向き合うのか」

日 時：2016年6月18日（土）15：00～16：30

場 所：国際平和ミュージアム1階ロビー

講 師：小原一真氏

参加者：60名

今回新たに設置された「人々」の部で組写真1位を受賞したフォトジャーナリスト小原一真氏を迎え、トークイベントを開催しました。冒頭、小原氏は欧米と日本におけるメディアの違いや日本人ジャーナリストの置かれている状況など、写真業界の現状について紹介しました。2011年の福島第一原子力発電所の事故を機にそれまでの仕事を辞めてフォトジャーナリストとなった小原氏は、原発事故処理の作業員や、かつて大阪空襲



で障害を追った人々への取材を経てチェルノブイリの取材を開始しました。原発事故から30年が経過し、観光地化がすすむ中「ホラー」「ゾンビ」などのハッシュタグのついたツアーがあることを目の当たりにした小原氏は、「現状をセンセーショナルな文脈の中で伝えるのではなく、事故以前には彼らにも普通の生活があったことに思いを巡らすことができるような写真を撮りたい」と考えるようになったと言います。受賞作“Exposure”は、チェルノブイリ原発事故で胎内被曝し、その後の30年間を人知れず生きてきた女性を取材した4枚の組写真です。被曝したフィルムを使用し、試行錯誤を繰り返したことで独特の表現が生まれたことを紹介しつつ、写真を通して被害者の目には見えない痛みを感じることができるのではないかと、自身の取材における「想像する余地を写真の中に残す必要性」と「それを補う言葉の重要性」について語りました。最後に、欧米の若い世代を中心に始まっている新しいジャーナリズムの取り組みについて紹介し、「抽象的表現はフィクションで撮る方が、より人間に働きかける力があり、リアルに感じられるのではないか」として、「今回の受賞作がとりわけ報道写真の中で評価されたことは、今の報道の大きな在り方だといえるのではないかと締めくくりました。会場となったロビーでは参加者が小原氏の話に聞き入り、イベント後には写真集を買い求める方も多くおられました。

「世界は今—紛争から和解へ、対立から共生へ」

「市民の力で核のない世界を

—原爆の凶アメリカ展と米国NGOヒバクシャ・ストーリーズの取り組みから—

8月20日の土曜講座の講師は、公益財団法人原爆の凶丸木美術館理事長であり、京都橘大学教授の小寺隆幸教授でした。

前日、国連欧州本部では、核軍縮に関する国連作業部会にて「核禁止のための法的措置」について2017年の交渉入りを国連に勧告する報告書が採択されました。そこにはオーストリア、メキシコなどの非核国138カ国の支持や多くの市民団体の支援が背景にありました。一方、核保有国は核拡散防止条約(NPT)にて核軍縮の義務を負っているにも関わらず、その動きは近年ストップしたままです。唯一の被爆国である日本政府は、先の採択を棄権しています。アメリカの北東アジア地域(日・中・韓)の安全保障政策のもとで、オバマ大統領訪広に際し湯崎広島知事や田上長崎市長は「核抑止は観念論」「核抑止に頼らない安全保障の枠組みである北東アジア非核兵器地帯を」と挨拶しています。オーストリアは核抑止は安全保障の面で現実的であるという考えを批判し、「核抑止は本質的に、敵味方の区別なく、すべての人類に受け入れがたい破壊と結末をもたらす。」と主張しています。

このような状況において、小寺先生が実際アメリカのワシントン、ボストン、ニューヨークにて、原爆の凶丸木美術館の

「原爆の凶アメリカ展」を開催し、各会場で被爆者の証言の集いやシンポジウムなどを行い、メディアにも報道され高い評価を受けた様子を紹介されました。そのような取り組みもあって、アメリカの世論も若い世代を中心に徐々に変化していることが数字でも示されています。危機感と希望を込めて、「核兵器は使われる可能性があるという認識に立っての運動が核兵器を縮小し廃絶する方向に世界の政治を動かすかもしれない」(大江健三郎)という言葉で講演は結ばれました。



講演を行う小寺隆幸先生

「紛争後の正義と和解をめぐる相克—痛ましい過去を乗り越える多様な試み」

8月27日の土曜講座は、本学国際関係学部のクロス京子准教授の講演がありました。

5月に訪広する前にオバマ大統領はマスコミに対して、「和解」のための訪問ということを強調していましたが、「和解」の意味するところは何か、誰と誰との和解なのか、和解とはどのような状態を指すのか、正義と和解との関係は、そして東ティモールでの「正義なくして和解なし」という言葉から講演が始まりました。

紛争終結方法や移行期正義の発達の歴史をたどり、そこに



講演を行うクロス京子先生

「移行期正義のジレンマ」があること、つまり紛争終結直後の状況下で、「正義」=「処罰」とした場合は政治的不安定を招く場合があり、一方「平和」=「不処罰」とした場合は犠牲者の人権軽視や法の支配の否定が起こる状況を指します。しかし国際的な人権意識の高まりの中で国際人権法が発達し、「移行期正義」の対象、つまり冷戦後の「新しい戦争」が拡大していきます。そこで今日の「移行期正義」の課題としては、過去と未来の二つの方向への働きかけがされるようになり、三つの「正義」にもとづいて、法的なものだけでなく心理的、社会的和解も進められ、真実の追及や紛争の根本原因である貧困や差別、抑圧への働きかけや是正をしていくことが重要であるということが強調されていました。ただし、揺り戻しもあり、真実和解委員会が形骸化したり、抑圧した側が責任の追及を逃れている例も多く、依然として課題山積という現実があります。講演後、参加者からは、慰安婦問題、テロ、南アフリカ、日中関係などの問題の所在について次々と質問が出され、クロス先生からは丁寧な説明が行われました。

以上二つの講演会で257名の参加がありました。

立命館大学国際平和ミュージアム 来館者 100 万人達成 !!

8月3日(水)午前、立命館大学国際平和ミュージアムは、来館者100万人を達成しました。来館者100万人目は、京都市右京区御室児童館で一行47名の皆さんです。100万人達成セレモニーでは、安齋育郎名誉館長より「御室児童館の皆さんには、100万人というと、ひとつふたつと数えて1ヶ月はかかるほどの数ですが、時間がある限り館内をよく見てください。」と語りかけられました。中島淳副館長からは「ミュージアムの課題はグローバルに広がっており、今現在でも世界でテロや紛争、貧困や環境問題などが発生しており、平和の課題に取り組むことが重要になっています。」とのお挨拶がありました。そして、100万人目の来館者である御室児童館の皆さんが紹介され祝福の拍手の中、代表の比嘉将吾さんへ記念品(ミュージアムグッズ詰め合わせ)が贈呈されました。比嘉さんからは、「児童館では夏に毎年ミュージアムを訪れており、子供たちにも戦争のこわさは伝わっているようです。」とお



来館100万人目達成セレモニーの様子

話がありました。

ここに来館100万人を達成できたことを、来館された方々ならびに長年本館を支え協力いただいた全ての方々、ミュージアムの出発点である市民の活動(戦争展)、戦争体験者、資料ご寄贈者、ボランティアガイド、学生スタッフ、教職員などに感謝したいと存じます。今後も、過去の歴史を踏まえ現代の平和問題に取り組む平和博物館として、大学と市民の連携、戦争体験継承の場としての役割、生徒・学生の学びの場として、地域社会・市民と共に歩む国際平和ミュージアムとして、一層の充実・発展をめざして歩んでまいります。

来館者データ (2016/4~9)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	
開館日数	25	25	27	27	26	19	—	—	—	149	
入館者数	1,786	4,286	5,683	2,781	2,118	1,580	—	—	—	18,234	
累計(開館当初からの入館者数)										1,003,405	
特別展	4/23~ 5/29	春季特別展 KYOTOGRAPHIE 共同企画「WILL: 意志、遺言、そして未来—報道写真家・福島菊次郎」									4,411
	6/ 3~ 7/24	特別展 「世界報道写真展 2016 —WORLD PRESS PHOTO 16—」									
	6/ 3~ 6/25	京都会場: 立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール									4,223
	6/27~ 7/ 8	滋賀会場: 立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命 21 エポックホール									852
	7/11~ 7/24	大分会場: 立命館アジア太平洋大学 A棟コンベンションホール									2,342
ミニ企画展示	4/ 1~ 4/22	第99回 「熟覧—メディア資料室の誘い」									—
	4/29~ 5/29	第100回 「満州報国農場とは何だったのか—東京農大湖北農場を中心に—」									—
	6/ 4~ 6/26	第101回 「遺品の語る沖縄戦—遺骨収容家・国吉勇」									—
	7/12~ 8/26	第102回 「ポストカード・インパクト」									—
	9/13~10/ 2	第103回 「ミュージアム・この1てん あたらしい憲法のはなし」									—
講演会ほか	〈春季特別展〉										
	4/23	ギャラリートーク 講師: 那須圭子氏 (フォトジャーナリスト)									31
	5/14	映画「ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎 90歳」上映会&トークセッション/アンスティチュ・フランセ関西 講師: 長谷川三郎監督、川村健一郎氏 (本学映像学部教授)									81
	〈世界報道写真展 2016〉										
	6/10	公開記念講演会「戦争の記憶の継承と写真の役割」講師: エリック・ソームズ博士 (オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所研究員)									100
	6/18	小原一真トークイベント「フォトジャーナリズムは時代にどう向き合うのか」講師: 小原一真氏 (フォトジャーナリスト)									60
	6/11	国際ワークショップ 講師: エリック・ソームズ博士 (オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所研究員)									40
	6/21	NGO ワークショップ「良心の囚人を救うために私たちができること〜アジア地域、発展の陰で苦しむ人々〜」 講師: 佐野陽子氏 (公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本会員)									11
	7/ 8	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト第1回ワークショップ									
	7/24	夏休み親子企画「へいわ」ってなに?? 2016〜きく、よむ、かんがえる 平和のはなし〜 講師: 安齋育郎名誉館長									35
	7/26~ 7/31	平成 28 年茨木市非核平和展 平和を求めて広がる非核都市宣言 (協力) / 茨木市立中央図書館									オープン
	7/27~	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会 (6 日間・7/27、7/28、7/29、8/17、8/18、8/19)									60
	〈立命館土曜講座〉「世界は今—紛争から和解へ、対立から共生へ」/ 末川記念会館										
	8/20	「市民の力で核のない世界を—原爆の図アメリカ展と米国 NGO ヒバクシャストーリーズの取り組みから」講師: 小寺隆幸氏 (京都橘大学教授)									120
	8/27	「紛争後の正義と和解をめぐる相克—痛ましい過去を乗り越える多様な試み」講師: クロス京子氏 (本学国際関係学部准教授)									130
	8/25~ 9/18	京都・大学ミュージアム連携合同展「大学は宝箱!」(収蔵品出品) / 同志社大学ハリス理化学館同志社ギャラリー2 階企画展示室									オープン
	9/11	第 50 回原爆忌全国俳句大会 (後援) (RENKEI PAX SCHOOL 2016 公開講演会) / 創思館カンファレンスホール									12
9/15	What is "I"? ~ Individual or "Dividual" 講師: 平野啓一郎氏 (作家)									70	
9/19	What does Israel fear from Palestine? 講師: ラジャ・シェハデ氏 (弁護士・作家)									48	

*会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集 後記

今年は例年と異なり前期に世界報道写真展が開催されたことで6月~9月にかけて行事が立て込み、そのピークにあたる平和のための京都の戦争展開催中に「来館者100万人達成」を迎えることになりました。ミュージアム発足の起源とも言える戦争展期間中に、いつも足を運んでいただいている地元の子供館の皆さんに100万人目が当たったことは決して偶然ではなく、地域や社会、市民に支えられた国際平和ミュージアムだからこその場面だったのではないのでしょうか。同じく、7月~8月にかけては来館者の半数を占める小中学校の団体見学の教員の方々の下見見学も、120校360名近くの学校の先生方が秋以降の平和学習・平和教育に向けて来館され、熱心に館内の見学や相談に訪れておられました。多忙な先生方のために当館でも7月、8月に各3日間「下見見学会」(平和講義、ガイド案内、収蔵品紹介、教材貸出紹介、個別相談会等)を開催していますが、今後も、博物館が平和教育の多様なニーズにいかに対応していくのかが、問われているところです。(編集局)

INFORMATION

ミニ企画展示室

第104回

第10回立命館附属校平和教育実践展示

立命館守山中学校・高等学校

会期：2016年12月4日（日）～12月16日（金）

内容：授業で作成した平和ポスター、ピース・スタディツアーや長崎平和研修のレポートなどを展示します。

※立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校、立命館小学校の展示は終了しました。

立命館附属校平和教育実践展示とは

立命館の初等・中等教育段階での「平和・人権・地球市民教育」の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生・中学生・高校生の平和・人権・環境などの課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を知ってもらおうとするものです。ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の方々に改めて平和を考える機会となればと考えています。



昨年度の展示の様子（守山中学校・高等学校）

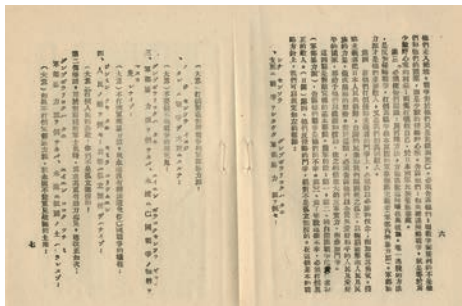
第105回

ミュージアム・この1てん「対敵宣伝須知」

会期：2017年1月12日（木）～1月31日（火）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：日中戦争期、中国国民党政府の下で対日本軍宣伝工作についてまとめられたこの冊子から、当時の日本軍または日本の戦争がどのようにとらえられていたのか、その一端を紹介します。



鹿地亘関係資料 ※瀬口允子氏寄託

第106回

第22回 京都ミュージアムロード参加企画「京都と空襲」

会期：2017年2月4日（土）～3月26日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

京都市内博物館連絡協議会、京都市教育委員会

内容：防空法による統制や建物疎開、京都への空襲計画、体験者の証言や資料などのテーマから、京都の空襲について紹介します。



防空演習・上京区衣棚通今出川上
※大塚隆コレクション

立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド募集説明会

当館の運営・趣旨を理解し、健康でガイド活動に意欲ある方を求めています。ガイド活動のあらましと登録までの流れなど説明いたしますので、ぜひご参加ください。
(従来の「養成講座」は開催いたしません。)

日時：2016年12月17日（土）午後1時30分から
場所：国際平和ミュージアム2階会議室
今回採用予定の人数：5人程度
申込不要・参加無料

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第24巻第2号（通巻69号）2016年12月6日発行
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899
<http://www.ritsumeij.ac.jp/mng/er/wp-museum>



日本平和博物館会議
JAPAN ASSOCIATION OF MUSEUMS